

[掲載紙] 朝日新聞「上州経済風信」

[掲載日] 2015年5月21日

[テーマ] 今月離任 1年振り返る—中小企業の地力 目の当たり—

前橋に着任し、ちょうど1年経過したところであるが、今月をもって離任することになった。支店長として最後の寄稿になる今回は群馬県での1年間を振り返らせて頂きたいと思う。

当地での日常生活を通して強く感じたことは、東京都心から100キロ圏内でありながら、地方としてのしっかりとした魅力を兼ね備えている点である。仕事の疲れを癒やしてくれる豊かな自然、非日常的な気分を高めてくれる隠れた名湯、そして当地でしか味わえない伝統食など数えきれない。同時に、首都圏に長く住みながら、なぜこれまでこの魅力に気付いてこなかったのだろうとやや不思議な思いにも駆られた。

経済面では、為替円安や米国経済の回復を背景とした主力の自動車産業の生産増を主因に、県内全体としてみれば、全国に比べ良好な経済状態が続いた1年であった。

また、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界文化遺産登録や「ぐんまちゃん」のゆるキャラグランプリ優勝など、県内経済に好影響をもたらす明るい話題が続いたことも特筆しておくべきだろう。

ただ一方で、全ての経済主体が好調であったわけではないことも事実。為替円安の負の影響は中小企業を中心に多くの先に及んだ。消費増税の影響などから個人消費のもたつき感も拭えなかった。景気回復の実感が県内に幅広く行き渡るにはもう少し時間を要するのかもしれない。

中小企業に対する自身の見方が劇的に変わった点も忘れられない。小規模事業者ながら華々しく海外展開をしている企業、環境変化に柔軟に対応し続ける中小企業など、当地企業の地力を目の当たりにした。

これまで大企業中心の「もの」の見方に偏りがちであった自分にとって大きな転換点となったように思う。

更に、人間力と識見を併せ持った地元金融機関・企業の経営者にお会いできたことも大きな財産である。そうした意味で「群馬に育ててもらった1年間」であったと心から感謝している。

1年前のこの欄で両毛線からみた赤城山に感動した思いをつづった。赤城山は「鶴舞う形の群馬県」のほぼ中央に位置し県内各地からその雄姿を眺めることができる。各地を巡った際に「地元から見える赤城山こそが一番」という地元自慢を多くの方々からうかがった。新緑の赤城山をもう一度眺めながら、楽しい思い出とともに、群馬を後にしたいと思う。

群馬県民の皆さま、本当にありがとうございました。

〔 日本銀行前橋支店長
富田 淳 〕